

現代日本 戲曲大系



三一書房編集部編

現代日本戯曲大系 第四巻 定価三八〇〇円
一九七一年八月三十一日 第一版第一刷発行

編者 三一書房編集部

発行者 田川敬吾

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話 東京(二九一)三二三一、五

振替 東京八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

収録作品の上演については、必ず著者または
著作権継承者に了解を得て下さい。

現代日本戲曲大系／第四卷／目次

長い墓標の列……………福田 善之 七

1958

署名人……………清水 邦夫 三
泥棒論語……………花田 清輝 五
木曾節お六……………深沢 七郎 六
市場……………堀内 茂男 二
娑婆に脱帽……………松木ひろし 二

1959

マリアの首……………田中千禾夫 一
漁港……………原 源一 一
友情舞踏会……………広田 雅之 三

松川事件	北条 秀司	二四五
反応工程	宮本 研	二九〇

1960

ほらんばか	秋浜 悟史	三三
がめつい奴	菊田 一夫	三三
檻	小林 勝	三七五
第三の証言	椎名 麟三	四一四

解説	岡村 春彦	四九
解題・付作品一覧		四五
演劇略年表(1958~1960)		四三
装幀 坂口 顕		

凡例

○作品は初稿雑誌発表年月（但し活字発表のない作品は初演年月）を基準に、同年内では作者名の五十音順に配列した。なお、年号は西暦で示した。

○作品は原則として新漢字新かなづかいにあらためた。

○明らかな誤字・脱字は訂正したが、送りがな・表記の不統一は原文どおりにした。

○文中の＊および注番号は原文に従い、該当作品末尾に注釈として付した。

○幕（場）数、登場人物・時・所の表記は原文どおりにした。

現代日本戲曲大系

第四卷

(1957~1960)

長い墓標の列

四幕

福田善之

山名 庄策 経済学部教授（純理派）

久子 その妻

弘子 その娘

靖 その息子

城崎 啓 助教授（山名の弟子）

花里 文雄 助手（山名の弟子）

林 祐之 演習学生

飯村 桂吉 演習学生

小西 兼夫 学生

村上 重吾 経済学部長

矢野哲次郎 経済学部教授（革新派）

千葉 順 新聞記者

ほか学生たち、新聞記者たち、など

1

昭和十三年秋のある午後。

大学の経済学部研究室。

正面奥は窓。その向うには銀杏並木。

時計が四つ鳴る。花里文雄（助手、二十八歳）

城崎啓（助教授、三十二歳）と学生七、八名。

緊張した沈黙。空がつきぬけるように青い。

林（学生、二十三歳。雑誌を読みながら鼻唄——

「暗い日曜日」かなんか——をうたいます）

花里 おい。やめてくれないかな。（どなる）林

君。

林（にこにこ）愛国行進曲うたいましょう

か？ 花里さん。

飯村（学生。関西なまりがある。小声で）林。

花里 ……

林（笑っている）

花里 君は、いいと思うの？ 負けても、われわれが、われわれの主張が、先生がいま、現在学部長室で進行している教授会でもし負けても、万一革新派が、反動どもが勝っても、君は。

林（またにこっと笑う）

花里 大学自治ってことはね、学問の発達のため

の絶対必要条件なんだよ。猫の目のように

変る当局のご都合で教授助教授がさっさと首

切られたらどういうことになるんだ、え？

大学の目的は真理の探求と人格の陶冶にある、

大学令第一条にちゃんとそうある、いつ首切

られるかわからない状態でなにが人格の陶冶

です、政治の方針がなんだろうと自由にどん

な学問でも研究できる保証がなくてなにが真

理の探求ですか。——なにがおかしいの。

林 いいえ。でも。

花里 でも？

林 はあ。なんになるんですか、ここでやきもきしてても。失礼ですけど。どうにも出来ないうんですばくたちには、ただ、待つてだけしか。

花里 (聞かず、学生たちに) 誰か、また見てくれないか？ 様子。

学生一 はい。(急いで出て行く)

花里 (歩き廻る)

間。口笛が聞える。

花里 (たちどまる——口笛の主に) 城崎さん。

……よくあなたはおちついていられるなあ。城崎 (窓から外を見つめている。笑って) おれたちには待つてることしかできない、それはほんとうだよ。これまでも、いつでもおれたちは、ただ待つてばかりいたような気がするがね。

(間) 銀杏の葉が、そろそろ黄色くなるな。

(間) この銀杏並木に黒い学生服の波がうずまいて、白墨をかたつばしから背中につけて廻る警官たちと、もみあったことがあった。あのアーケードじゃビル箱の演壇でアジ演説がひっきりなしだった。三階の窓から日本共産党万歳ののぼりがおろされたことさえあった。今は昔。——デモに代る軍事教練だね。

千葉 (三十二歳、新聞記者) 登場。

千葉 電話、借りるぞ。(ダイヤルを廻す)

花里 どうですか、具合は？

千葉 (首を振る。電話に) 千葉です、デスク……まだ終らんですよ教授会……ええ、予想どお

り紺野以下革新派の四人が文部省案支持……反対はいまのところ山名教授一人……え？

そう、四対一……そうですよ、もう山名さんしかいないんですよ、もう左にゃ誰もいないんだ……中間派の六人はカキの如く口をつぐんで語らず……革新派の主張はね、主張は(メモを繰る) こうです、原則的には、大学の自治は否定すべきではない、ないが国家目的の遂行をあきらかに妨害するような自治の濫用がある場合には、これは制限されなければならぬ、是正する必要がある……え？ も

ちろん国家がですよ、文部当局が……だから当局が教授助教授の任免権をもつのは当然だと。ええ。

林 支那事変は思想戦である。

飯村 なに？

林 『新公論』の巻頭言。(雑誌を読んでいる)

城崎 (黙って窓ぎわをはなれて舞台中央の椅子に坐る)

千葉 山名教授の主張はね、じゃいったい国家目的の遂行とは何か、それに反したかどうかを判断するのは、当然大学自身であるべきじゃないか、つまり学問の自由、権力からの独立論ですな……予想？ そら、何とも……経済学部には毎日数字とにらめっこばっかの老朽教授がウヨウヨいるんでね、その連中がいつでも中間派でいつでもキャスティング・ボート……ええええ、万事そうだったものかもしれません、そりゃ……じゃ。(不きげんに切

る) ふん。

城崎 千葉、誰に聞いたんだ？

千葉 矢野教授、山名君の戦いぶりは、敵ながらあつぱれだとき……便所に出て来たの、くさいとまでお伴したな。(間) 危ねえな、こ

んだ。ほんとに。

千葉のまわりに皆集つて来る。

花里 革新派が、勝つということですか？

千葉 君ら、どう思うんだ？ 弟子として。

城崎 何を。

千葉 おれは、ここで先生が、負けた方がいいと思うんだ。負けるべきなんだ。

花里 (気色ばむ) どういうことです。

千葉 いま、経済学部が、文部省案反対にきまるとする。すればそれは、山名教授の力によつてだ。そうなる。

城崎 (やがて) うむ。

千葉 おれは、おれも弟子として、昔教えをうけた一人として心配してるんだ、先生の身を。花里 しかし、千葉さん、問題は、大学の自治です。自由です、いや、大学じゃない、学問の。

千葉 花里君。革新派グループは大学内だけの組織じゃないぞ。(学生たちの顔をみて、黙る)

城崎 軍か。……バックには、軍と、官僚とのコンピネーションがある、かね。大丈夫、皆演習学生だ。

千葉 時代だよ、彼らのバックは。世界情勢だよ。

花里 違います、お言葉ですが。そりゃ、ドイツにおけるナチの制覇が、彼ら反動どもに力を与えたということはあるでしょうたしかにしかし。

千葉 反動ども？ 革新派のことかね。

花里 含みます、彼らを。

城崎 (笑う) 革新が反動、反動が革新。

千葉 笑いごとじゃない。(きびしく) 変ったんだ、世の中が、とにかく。

城崎 変わるもんなんだよ、世の中ってものは。

飯村 (立ち上る) ああ、やっぱり、革新は革新で、反動は反動やと、ぼくは思います。

林 馬鹿。(坐らせる)

城崎 (飯村に) ぼくも、それはそう思うよ。物事ははつきりしてなくちゃいけない。そうありたいもんだ。(窓際へもどる)

千葉 城崎。

学生一、帰ってくる。皆注目。

学生一 (首を振る) まだ、全然……

学生二 (代って出て行く)

千葉 (時計を見て、出て行きながらポケットから新聞をひき出して学生たちに) これでも読みたまえ。学生にもそういうのがいる。(急いで退場)

林 (受け取って) 右翼の新聞ですね。やあ、大

学わずかに存す正気と来た。……純真なる学生にたいし大学教授の講壇より与えつつあるものは何であるか、それは祖国を呪い、わが

国体に反逆する……

飯村 (奪って) さる九月二十日山名庄策教授は

その担任する社会政策講座において、マルキストが従来自由主義者を敵視したのはあやまりであった、とのべたのち、われわれはいまこそマルキストと手をにぎり、ともに人民戦線として右翼に砲弾をうちこまねばならぬ……

花里 (いらいらと) やめたまえ! (間) 四時半だ、もう。

林が、また歌をくちずさむ。

飯村 (黙読していたが、やがて) おい、この投書した小西いうの……去年、うちのゼミにいた奴とちがうか。

学生一 まさか、と思うけど。

飯村 林、お前——

林 知らん。

学生三 (はつきり) なんとかしないといけないな、おれたちも。山名ゼミの演習学生として。

飯村 (うなづく) 出来るだけの力は……頑張ってもらうんや、先生に。

林 何すんだ、いったい。

飯村 (林に) きさま……そらお前は、演習内の反対派や山名イズム批判派や……マルクシズムの立場からは先生を支援出来んのか?

林 マルクシストじゃねえよおれ。

飯村 マルクシスト崩れやろ。(間) 豚箱に入っ

た、おやじに日本刀で追ひ廻された、それが得意なんか。(間)

学生一 あのねえ、林君の先生批判の要点はね、議会議主義にたいする信頼の問題だと思うんだ、

でね、そりゃやっぱり認識論から——

学生四 甘えさ山名イズムは、人格主義的理想主義的社会主義なんて。しかし、マルクシズムの崩壊したあのおれたちにとって、これを信じるしか道はねえな。

学生一 同感。

学生四 信じるんだよ。

学生三 ちよつと。マルクシズムが崩壊した?

学生四 だって、軒並みコロリ転向したじゃねえか、みんな。

学生三 転向してないマルクシストだっていますよ。

飯村 行動しないマルクシストがマルクシストか?

城崎 (窓ぎわで) 静かにしろよ。

花里 しんとなる。

城崎 私、また見て来ます。(行きかける)

城崎 (外を見下して) 新聞の連中がざわめき出したぜ。ほら。

学生二 (とびこんできて) 終わったらしいです!(すぐ去る)

花里 飯村他学生たち色めいて飛び出して行く。

城崎 行かないのかい、君は。

林 城崎さんは?

城崎 ぼくは待ってる。(笑う)

林 (笑う) でも、勝つのを、ですか、負けるのを、ですか。

城崎 (みつめる) どっちかにきまるのを、さ。

だいぶやられてたね、さつきは。

林 ええ。

城崎 君はどうして山名ゼミに來たの？

林 いやだな。ぼくは質問だけしようと思つてたのに。

城崎 不遜な考えだね、それは。(問)君は、いつも、何もあてになるものかつて顔をしてる。

誰も信じられないって面をね。信じなくちゃとてもいられないからだろうな。

林 ぼくは、ぼくを信じないだけです。

城崎 で、何かを、誰かを信じられれば、人間が、自分が信じられる。弱虫なんだな。

林 ぼくは弱虫ですよ。

城崎 いいじゃないか弱虫。おれは好きだな。

外に、どつと歓声がある。

林 質問にお答えします。……ぼくが三高に入つたとき、山名先生は文部省の思想善導委員でした。反マルクシズムの大將で、つまり、反動のコチコチで、流れにさからうもので、……ぼくら大変憎んで、軽蔑しました。

外の声——山名先生万歳！ 拍手。

城崎 きまつたようだね。

林 ええ。(問)きまつたら？

城崎 きまつたら、はつきりしてくるさ、いろいろなことだね。ということとは、何かがはじまる、ということじゃないか。

ざわめきが近づいて来る。

城崎 わかつたよ、君のつもりは。……世の中は変つた、しかし、彼は変らない。

林 いままででは、です。ぼくは、見てゐるつもりなんです。

城崎 誰が、いつへこたれるか、をか……しかなかなかむずかしいことだぜ、見てゐるつて。

飯村、学生たち、かけこんでくる。

学生二 勝つた！ 六対五！

飯村 賛成は、革新派四人と、広野さんの五人だけです、あと全部反対や、大学の自由守るる！ 矢野さんや紺野さんすごい顔してはつた。はははッ。

山名庄策教授(四十九歳)登場、新聞記者数人がつづく。千葉、花里も。

記者一 しかしですな先生、革新派も声明を出すといつてゐるんですから。

記者二 ぜいおねがいします、ぜい。

山名 今日はいよいよいいじゃないか、いまの学部長の発表でつきてゐるんだから。

記者一 しかし、先生、先生が——

山名 すまないが、ほんとうに今日は、私は何も申し上げることはありません。

記者たち不平をいいながら退場、千葉はのこる。問。

花里 (興奮している)先生。

山名 うん？ (にやりと笑う)やあ、皆いるね。

城崎 どうも、大変だったようですね。お疲れでしょう。

山名 筋を通すことだけはね、出来た。(坐る。何となく笑う)

飯村 先生、おめでとうございます。

学生四 頑張ってください。これからも。山名 (うなずく)

城崎 これからの問題ですが、どう出ますかね。相手は。(茶をつぐ)

山名 うむ。(飲む)さつきは、ぶつた斬つてやりたかつたね、革新派の連中を、まったく……

……経済学部の教授にファシストのグループが生まれるとは思わなかつたよ。二・二六の反乱軍に比すべきだろうな……(一人でしきりに語る)もつとも、こういう傾斜する時代だ、知識階級も波にまきこまれずにおられんわけだろうが……ふん、問題を回避していたらきりがない……(また茶を飲む。机の上にあるさつきの新聞を何気なくとり上げて読む)

千葉 先生。

山名 (やがて顔をあげる)君か。今日は新聞の方はかんべんねがつたんだよ。

千葉 いえ、私、ひとりの……弟子として。先生、(新聞をさし)ほんとうに、こういうことを。

山名 どういうこと？

千葉 つまり、マルクシストと手を結んで……

山名 問題を特定しての提携は可能だ、といつただけさ。日本の社会主義勢力は、この時代に一致してファシズムにあたるべきでしょう。なに、いわば仲間うち足のひっぱりつこばかりやつてゐる。相互批判は必要だがね絶対に。それをいっただけさ。

千葉 はあ。しかし、先生。

山名 日本の社会主義はね、日本の、はだよ、自由主義を敵とすべきじゃなくてむしろ内容としなきゃいけない、と私が昔からいつているのは知ってるね。もちろん経済上の自由主義のことじゃなくて思想上の。言論の自由、集会の、宗教の——つまり、近代的諸権利の、拡充、というかな、それは、個人の人間としての自覚というものの……

千葉（じれて）しかし先生、問題は。山名 何だね？

千葉 これはまたかならず貴族院で問題になります。この新聞のバックは例の養田胸喜らの右翼団体です。養田と近い矢田男爵らが議会で先生攻撃の質問を出すのは目に見えています。先生は、そのときも、そういうお答えをされるつもりですか？

山名 ほかにいいようもないがなあ。言葉つかいの問題なら多少注意は——

千葉 国体を破壊するマルクス思想と同一であると断定されています。

山名 そんな馬鹿な。私はマルクスストじゃない。

千葉（はげしく）それが、あまいんです。（間）失礼しました。しかし……私は、これ以上一分頭張ることは、一分だけ……お命が、ちぢまるようなものだ、と。

花里 千葉さん、しかし現在の内閣は、むしろ右翼や軍の行き過ぎをおさえて、問題を平和的に——

山名 千葉君。君がどうしたらいいというのですか。

長い間。

千葉 先生。（間）転向してただけじゃないでしょうか。

花里 千葉さん！

千葉 もう、自由主義の時代ではありません。個人の自覚や、近代的権利を問題にする時期は過ぎたといわざるを得ません。個人でなく全体が、民族が。

城崎 君はいつ国家主義に転向したんだね。

千葉 おれは新聞記者だ。（山名に）私には、学説のことはよくわかりません。しかし、世界的にみても、個人の自由とか権利とか、そういったものの上に築かれた文明は、デモクラシーは、行き詰っている、にっちもさっちも行かない、それは私にもわかります。今日、先生は勝たれました。しかし、明日、その勝ったことが、……先生、このままでは、時間の問題です、先生が大学から追われるのは。城崎 それは、君の推測か？ それともたしかな根拠があるのか？

千葉 わかりきつたことをいつてるんだおれは。

花里 しかし、大学がこうして自由を擁護する態度を決定した以上、理由なく教授の身分を動かすことは、誰にも出来ません。大学が一致して先生を守れば、守れる、かならず守れるんです。守らなきゃ……しょうがないんです。

城崎 だが、大学の一致はもう崩れてる。花里 城崎さんは、どうして事態を悲観的に——

城崎 そうじゃない。ぼくは事態を冷静にみたんだ。そこから正しい対策が生まれる。ただ興奮しても駄目だ。

花里 とにかく、事実です、これ以上一步もさがれないことは。

城崎 うむ。もうあともしり出来ないこともね。山名（目をつむっている）

花里 先生。そのために……事態が千葉さんのいうようにけつして樂觀を許さないとすれば……ともあれ十分にご注意なさらないと、いけないんじゃないでしょうか？

山名 うむ。

花里 たとえば……先生も先程おっしゃっていられたことですが、言葉……表現に配慮されるということ、たとえば……社会主義とか、自由主義とかの言葉も、です、そのまますばりといわれることを……もしそれが一般を、無用に刺激するとすれば。

城崎 そりゃおかしいね。

千葉（ほとんど同時に）なにをいつてるんだ——城崎（花里に）表現の問題じゃないよ。先生は社会主義者だ、そして自由主義者だ。それでいいじゃないか。

花里（城崎に）しかし、彼らに口実を与えてはいけないのです！千葉（烈しく二人に）君らは、それでも弟子か、

え？

城崎 どういうことだね。

千葉 先生におもねるばかりが弟子の道かというんだ。俺は君らのように日常薫陶をうけてる弟子じゃない。君らのように先生の学説についてよくは知らん。しかし、情勢の危険なことや、右翼の狂暴さについてはよく知ってるつもりだ。

長い間、学生たちも遠くから山名をみつめている。

山名 (やがて) 私には転向ということがわからないんだ。……学説の発展ということは当然あることだし、今までの自分の思想がまちがっていたと気づくことも、それはあるでしょう。しかし、その場合には、それまで自分が教えていた学生たちにたいして当然責任をとらねばならない。それまではまちがったことを教えていたことになるのだからね。その人たちをも納得せしめるだけの強いものをもった変化でなければならぬ。……今まで転向した人の数は多いが、あまりそういう例をみないのは嘆くべきことです。その人たちの転向が、真実の学説の発展ではなかったことだろうと思う。……私は自分の学説に現在訂正の必要も認めないし、したがって転向の意志もありません。

千葉 しかし……先生。

山名 暴力についてはね、二・二六事件、いや、五・一五事件の時から覚悟していましたよ。

覚悟の上で、した批判でした、すべて。……また私はね、転向した人びとの多くが家庭にたいする情を理由にあげているようだが、それもまったくわからないな。社会政策の学徒である以上世の中の変化によって危険がおとずれるくらいは百も承知でいなければならんし、家族にも、その覚悟を与えていないようなら、その人の学徒としての態度には、はじめから欠陥があったのだと思う。

皆、沈黙——

城崎 わかります。よく。

山名 (やがて) 今朝、総長によばれてね……話では、大臣がこういったというんだな総長に。大学の現在の状態には諸方にかなり強い不満がある、だからこんど程度の案でも大学が拒否するようなことがあれば、いかなる事態になるかはかりがたい。——どうも、案外早く、私が大学から追われるという日が来るかもしれないね。(城崎と花里に) その時の、君たちの身のふりかたのことだが。

花里 先生、そんな、去られるときのことなぞ。

山名 もちろん、そう急な問題ではないと思うがね、しかし、そういうときの態勢も整えておくことは、敗北主義とはちがうよ。

花里 先生が、大学を去られるときは、私たちも去るときです。

城崎 (静かに) 同感です。……これはたんなる

感情ではないんで、先生が追われるということとは、大学から研究の自由が完全に失われる

ことを意味しますからね。そういういわば抜けがらになった大学に残ることは、われわれ学徒としての信念が許しません。

飯村 (突然大きく) ぼくも……大学をやめます。花里 (あわてて) いや、君ら学生はぜんぜん別だよ。

学生三 先生……ぼくら、いまは、ぜひ頑張り続けていたきたい、としかいえません、残念です……しかし、先生はおひとりではない……ということは、先生の行動は、先生ひとりのことではなく、ぼくらみんなのこと、なんです……うまくいえませんが、ぼくら出来るだけのことはしたいと思っています。

飯村 同感です。

山名 ありがとう。(間) 私が墓穴を掘りつつある、というみかたも出来るだろう。自分一個の安全を主とする考えからすればね。総長は、私の「ファシズム批判論集」を自分から絶版にしるともいわれたんだよ。(間) しかし、あともどりが出来ないとするれば、前へ進むしかしたくないじゃないか。こういうときこそ、はつきり、自分の役割を、というか、あらためてとらえなおして、自覚した歩みを、歩む、ということをしなければ。それが、必要なんだ、日本のために。一時の感情からではなく、冷静に、城崎君のいうように、ね。花里君、その問題はゆつくりと話し合うことにしようじゃないか。

花里 ……はい。

弘子登場。

山名 千葉君。もう君の話はいいですか。

千葉 ……はあ。

山名 (時計をみて立つ) 娘と、映画に行く約束をしてるのだがね。どう、君らもよかったら。

城崎 私はちょっと書きものが……『改造』から、また。

山名 よかったねそりゃ、先月のが好評だし。

奥さんも喜んでるだらう原稿料。あの「統制経済と戦争経済」については、大いに論じたんだが……そうだ、明日やろう。

城崎 心得ました。

山名 花里君。行こう。

花里 はあ。じゃ、お伴します。

山名 (皆に) じゃ。(弘子とともに退場。花里もつづく)

城崎 (机に向う)

千葉 (呆然としていたが) 象牙の塔たあよくいった。(退場)

静かになる。学生たちは話し合うもの、勉強にもどるもの、など。

林 城崎さん。

城崎 うん?

林 (にこにこして) 美わしかったですね、師弟愛。

城崎 (ほほ笑む) ありがと。

飯村 (学生三と話していたが) 林。

林 感動的な場面でした。でも。

城崎 でも? (笑う)

林 質問なんです……失礼ですが、食べるんですか大学やめて。

飯村 林、貴様は。

城崎 つまり、君の見るのは、ぼくも、なんだろう。

林 (お辞儀する) ぼくも読みました、「統制経済と戦争経済」……あれ、戦争は社会主義化を進めるってことですか?

城崎 そうはいっていないよ。

林 でも、革新派だって喜びそうな論文ですね。

飯村 (そばへ来ていた、いきなり) そや……そういつてはいない……ところが肝心のところ……とちがいますか……失礼かな……いいですか。

城崎 いいよ。どうぞ。

飯村 戦争は、社会政策の採用を必然的にすること……統制経済に必然的に移行する……ということ……述べたわけですね、客観的に……絶対客観的に。

城崎 そう。

飯村 で、それは、そうなるべき……そうならなくてはいけない、というのか……

城崎 そうなるだらう、というんだよ。

飯村 そや……そうなるだらう、ということなんです……

学生二 (くわわって) たいへん明快な分析だと思えます、ほんとに。しかし、あれにはゾルレンがない、というか——

飯村 そう、なんです。その、実践の立場っていうか……比較しちゃ失礼ですが、かつての

マルクシストで、なんや、いますぐにでも革命起きなあかん、いうてた人なんか近頃……なんかえらい客観的な、どこに自分があるんかわからん論文を、書いてる。

城崎 ふむ。君のいう実践の立場が、はっきりしてるってのは、たとえば山名先生なんかならう?

飯村 そうです。だから、ぼくは、先生を一番ん尊敬してるんです。

城崎 うん、ぼくも尊敬してる。先生は、先生の道を歩きつづけるだらうな、これからも。だから、さ、ぼくもぼくの道を歩かなくちゃならないのさ。

飯村 はあ。だから、その城崎さんのイズムが、どういふものか。

城崎 君の、こないだの報告ね、ドイツ社会民主党の分裂。

飯村 はあ……どうも、はずかしうって。

城崎 君はドイツの反動化の原因を、社会民主党の人びとのイズムによる分裂——その結果からする弱体化に求めているね。つまり、社会主義陣営が分裂したから、反動化した。

飯村 はあ。

城崎 こういふの見せようかな。(書類を出す)

学生たちが城崎のそばへ集る。

城崎 こりゃ、製造工業について年生産額から見た産業構成の比重をね、表にしてみたもんだが……昭和六年、満州事変のはじまった年だな……紡績が全産業の三七・二パーセント

で圧倒的に第一位。これに、金属、機械、化学の三部門を対比する。八・三、九・六、一五・七、合計三三・七で紡績の三七・二に三つ合わせてもおよばない。これが……昭和十一年、紡績は二九・八とがた落ちだ。十二年、去年には二五・六になってる。ところが、金属機械化学の合計は、十一年四九・二、十二年五四・四……全産業の過半を占める数字に飛躍的に上昇してる。

飯村（間）はあ。

城崎 他の部門……食料品……六年、一六・二……十一年、一〇・三、十二年、九・六、一割を割っちゃった。印刷製本……三・四……一・九、一・七……

林 で？

城崎 政府は事変の不拡大方針をしきりに唱えてるね、綜合雑誌だけみてれば言論も全面戦争に反対してる。だけど満州事変以来とうに産業構成そのものは、民需や輸出を犠牲にして軍需生産重点に再編成されてる……上半身と下半身は別ってことさ。（笑う）日本の下半身はとうに全面戦争に突入してる。何も日本にかぎったことじゃないだろうな。

飯村 すると、城崎さんは……城崎さんの意見は、いまだうすれば……つまり、この現実はどうにか、なんとかせなあかんわけで……

城崎 ぼくは客観的な事実を示しただけさ。（ふいに）何か、用ですか、君たち？（皆、扉の方をふりむく）

いつの間にか小西兼夫（二十三歳、学生）ともうひとりの男が登場して、聞いていた。

小西 山名先生は、おいでになりますか。

城崎 もう帰られましたか。

小西 ——お宅の方に？

城崎 そうじゃないけれど……（電話が鳴る。出て）はい……山名研究室……先生はさきほど……城崎です……評論社？

……城崎です……評論社？

小西（近づく）

小西（小さく）お前、まだいたのか、こんなゼミに。

林 お前こそ、どうしてんだ、近頃。（間）何しに来たんだ。（ほかの学生たちも遠巻きに近づく）

小西 早くやめろ。忠告しとく。

林 昔の、同志として、か？

城崎（電話口で）え。ほんとですか？（皆彼に注目する）……うん、とうとうねえ……その四冊？ そう、すぐ先生に連絡します。（切る）

飯村 なにか……城崎さん。

城崎 発禁だよ。ファシズム批判論集、自由主義論、学生生活、それから、社会政策講義。

学生四 教科書じゃないか！

城崎 午後五時の発令だそうだ。いま、市内の本屋を、いつせいに警保局のトラックが押収にまわっている……

飯村 先生の、責任は——

城崎 辞職せざるを得ない。ということになるね。

沈黙——

林 今日の教授会の結果をみて……発令したんでしょうか？

城崎 そうだろう。待機してたんだな。

沈黙—— 小西と連れの男が出て行く。

城崎（大きくのびをする）

——幕——

2

山名教授の家。下手は小さな家族の食堂兼居間奥は障子で開ければ廊下。上手は山名の書斎兼応接間（洋間）。壁は一面書棚、奥手にドア。前舞台と家の周囲の空間は庭、ある場合には道、玄関は家の下手よりの後側にあるつもり。つまりその側が表の道に面しており、舞台前面は裏である。一部に生垣と木戸を庭と道を区別するためにおいてもよい。居間には藩縁があつて庭から上れる。

一幕から三カ月後、昭和十四年一月。くもり空の午後。

書斎には誰もいない。居間の縁に外出帰りらしく着飾った和服の弘子（山名の娘、二十歳）がぼんやり腰を下している。奥から電話に応答している久子（山名の妻、四十歳）の声が聞えている。

久子の声 ……はあ、散歩と申しておりましたか……さあ、どこへ参りましたんですか、な